

マレーシア

景気に底打ちの兆し

SMBC Asia Monthly

日本総合研究所 調査部

研究員 塚田 雄太

E-mail : tsukada.yuta@jri.co.jp

4～6月期は減速も、足元で小幅持ち直しの兆し

2016年4～6月期の実質GDPは前年同期比+4.0%と1～3月期(同+4.2%)から減速した(右上図)。減速は15年1～3月期以来、6四半期連続である。もっとも、景気減速の主因は在庫調整の進展である。在庫投資の寄与度は1～3月期の+2.0%ポイントから4～6月期に1.2%ポイントに転じた。一方、民間消費や政府消費、総固定資本形成、輸出は加速しており、景気に底打ちの兆しを見て取れる。

民間消費は、インフレ圧力の後退を背景とした消費者マインドの改善や、15年4月の物品・サービス税(GST)導入前の駆け込み需要の反動減の一巡が押し上げに寄与した。総固定資本形成は政府のインフラ開発の進展などが追い風となった。輸出は、景気が持ち直している米国向けやベトナム向けなどで増加した。

7月以降も、景気は持ち直し傾向が続いている。7～8月の鉱工業生産指数は前年同期比+4.5%と4～6月期(同+3.8%)から伸びを拡大させたほか、消費者マインドも一段と改善している。

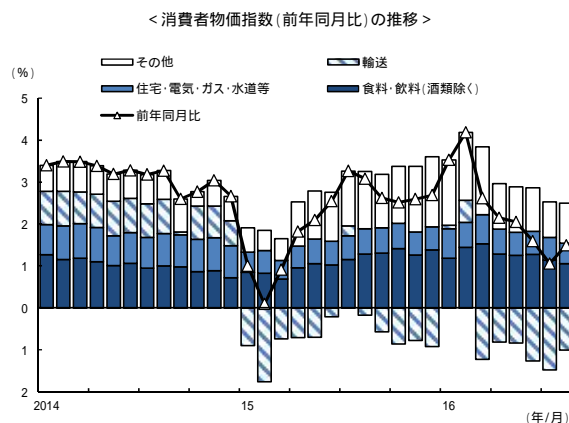
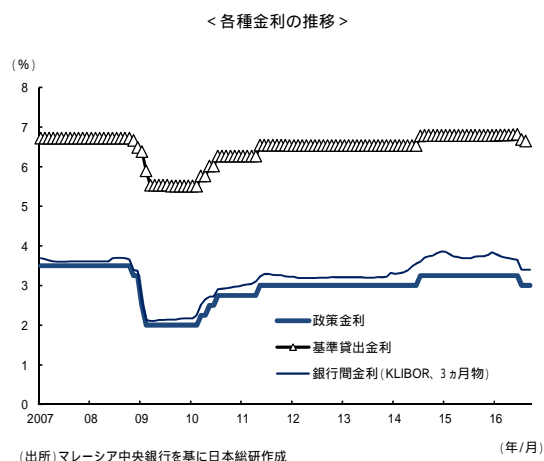
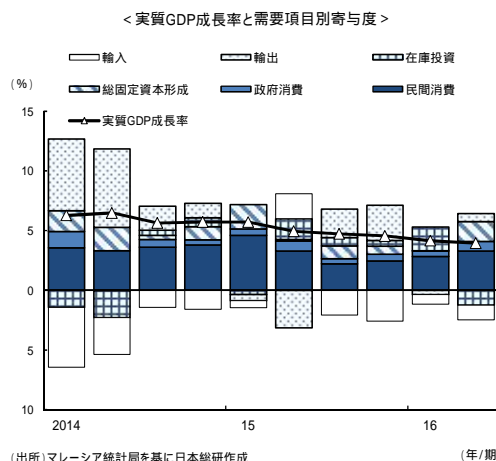
先行きも、景気は緩やかな持ち直し基調をたどると見込まれる。外需は世界景気の回復が緩慢にとどまるなか力強さを欠く展開を余儀なくされるものの、内需は公共事業の進展や、後述する利下げ効果の発現などが押し上げに作用しよう。

中銀が約7年半ぶりに利下げ

中銀は、インフレ圧力の後退を受け、景気のコト入れを目指して、16年7月に09年1月以来となる利下げに踏み切った(右中央図)。

インフレ率は、15年2月にかけて原油価格の下落などを受け+0.0%付近まで低下したものの、その後GST導入や通貨安などから急上昇し、16年3月には+4.2%と08年12月(+4.4%)以来の高水準となった(右下図)。もっとも、16年4月以降、GST導入の影響はく落したこともあって、インフレ率が7月に+1.1%まで低下したことから、中銀は利下げ環境が整ったと判断された。

先行きを展望すると、資源価格の低迷などを背景に当面低インフレが続くと見込まれるなか、中銀は米国利上げの影響などマーケット動向に注意を払いつつも、景気を確実に回復させるべく、一段の利下げを進めると予想される。



当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。当レポートは単に情報提供を目的に作成されており、その正確性を当行及び情報提供元が保証するものではなく、また掲載された内容は経済情勢等の変化により変更される事があります。掲載情報は利用者の責任と判断でご利用頂き、また個別の案件につきましては法律・会計・税務等の各方面の専門家にご相談下さるようお願い致します。万一、利用者が当情報の利用に関して損害を被った場合、当行及び情報提供元はその原因の如何を問わず賠償の責を負いません。